

「保健医療科学」
第62巻 第2号 予告

特集：現存被ばく状況下における放射線リスクコミュニケーション（仮題）

原発事故後の行政対応（仮題）	金谷泰宏
低線量放射線被ばくの健康影響について（仮題）	大津留晶, 宮崎真
飲食品の基準とモニタリングの実態, 被ばく線量評価（仮題）	山口一郎, 寺田宙, 他
放射線災害時におけるメンタルヘルスサポートの課題（仮題）	金吉晴
リスク認知とリスクコミュニケーション（仮題）	堀口逸子
保健所の健康危機管理における役割（仮題）	倉橋俊至
放射線災害時の保健師の活動支援のあり方（仮題）	奥田博子
福島原発事故による地域社会と医療への影響（仮題）	及川友好, 他
放射線業務従事者の健康管理（仮題）	樺田尚樹, 他
放射線生物学から見た低線量放射線の生体影響（仮題）	志村勉, 他

編 集 後 記

地域のなかでケアが効果的に提供されること、しかも、投入する費用や労力等の観点から効率的に提供されること、そして、そうしたケアを地域住民が必要に応じて公平に利用できること、こうした地域ケアのシステムが存在することは、誰しもが望ましいと感じるだろう。それでは、現状のケアシステムがどのような状態にあるのか、望ましい状態との差を埋めるためにどのような改善が必要なのかということは、如何にして明らかにできるのだろうか。そのためには、どのような実証データが必要になるのだろうか。こうした問いは、とりたてて新しいものではない。現代の特徴的な点のひとつは、システム評価に活用できそうな情報が、質的にも量的にも飛躍的に増大しており、また、膨大な情報を集積・加工する選択の幅も増えている点にある。保健医療のサービスの測定可能性と測定データの加工可能性の広がりの中で、それらを、システム評価に資するエビデンスデータとして如何につくり上げるかが、問われているといえよう。本号の特集は、ヘルスケアシステムの評価をめぐる古典的な問いに、情報の測定・活用の新機軸をもって挑戦するという、野心的試みである。国際的発信という観点から英文が多く、読み進める上でハードルが高いと感じる方もおられるかと思うが、是非、その刺激的内容を読者自身の目で確かめていただきたい。

(医療・福祉サービス研究部 森川美絵)